

創作「完璧な水槽」

鷺尾 日香里

記憶は、淡い光のなかから始まる。

誰かが歌を口ずさんでいた。

可愛らしいメロディは、瞳子の意識を丁寧に愛撫する。

節に合わせて、瞳子の身体は揺りかごのように、ゆったりと揺れる。瞳子はまどろむ。白い色が視界いっぱいにはみ込んでいく。内側からほのかに光が差すような白さだった。手を伸ばすと、柔らかな何かは瞳子の手をすっぽりと包み込んだ。温かかった。

ここがどこなのか、この温度の主は誰なのか——いや、自分が誰なのかさえ、どうでもよかった。

何の心配も要らない。全てを任せて無心に甘える。原初の記憶。

とうとう、おやすみ。穏やかな声が降ってくる。優しい香りにくるまれて、瞳子はまどろむ。

始まりの記憶はそこで途切れる。

次の記憶は、「おかあさん」だったものが別の生き物に変容したことを知った記憶だ。

それはいつも、時代錯誤な紅の襦袢をまとっている。

座敷の窓際にしどけなく座つてゐるのを、瞳子は襖を細く開けて見ていた。毒々しい紅の襦袢の裾から、少女のように華奢な爪先がのぞいている。濡れ羽色の髪は無頓着に背中へ流したままなのに、ため息が出るほど美しかった。障子越しの陽ざしをうけて、その頬は白く光つている。襦袢の色が、目を刺す。血のように鮮烈な赤。けれど、真綿のように柔らかな陽ざしにくるまれてゐるその姿は、上品な水彩画のようだった。

瞳子は恐る恐る襖を開けて、

「おかあ、さん……」

と、呼ぶ。すると、それは瞳子を見てにつこりした。たおやかな動きで左手を持ちあげる。紅の袖から覗く真つ白な手首は折れそうに細く、優雅だった。それは、魚の泳ぐさまを思わせるなめらかさで手のひらを上下に揺すつた。おいで、おいで、と手招きしてゐるつもりなのだろう。けれど、言葉を紡いではいくれない。迷つた末に、瞳子は襖をさらに開けて、おすおすと座敷に入った。それは、珍しく機嫌が良さそうだった。じいっと瞳子を見つめてゐる。その瞳は黒目が異様に大きくて丸く、見つめられると落ち着かない気分になった。

一階の和室にはほとんど入つたことがない。物珍しさから、きよろきよろと室内を見回した。和室なのに欄間の透かし彫りや照明のデザインは洋風で、不思議な雰囲気だった。襖を背にして右手には押入れ、左手には障子が閉まつたままの窓。正面に床の間がある。掛け軸や花瓶の類はない。そこには、金魚鉢が据えられてあつた。瞳子がどうにか抱えられるくらい大きな大きさの金魚鉢だ。底に白い玉砂利がしきつめられ、新鮮な水がはつてある。緑の水草の間をすり抜けるように、そよりそよりと赤い金魚が泳いでゐる。夏祭りの金魚すくいであつた金魚だ。

ふと、その頬が奇妙に動いてゐることに気付いた。小さな子どもが飴玉を転がすようにごろごろと蠢いてゐる。はつとして、金魚鉢を見る。いち、に、さん……

四匹目が、いない。

その赤い唇が、にやつと笑った。

ごろりと重たい音がした。何かが落下した。瞳子は息を飲んで立ち竦む。丸々と太り、濡れた光で彩られた金魚がその膝の上でぴちぴち跳ねた。その動きがみるみる鈍くなっていくのから、瞳子は目を離せなかった。ふわ、と空気が動いた。生臭い、生き物の棲んでいる水の匂いがした。それは自分の膝の上で息絶えつつある魚を、目を細めて眺めている。

赤く熟れきつた唇が、金魚の鱗のように濡れた光を放っていた。

*

いち、に、さん、し、ご、ろく……

空を突き刺すようにそびえ立つ高層ビルを見上げていると、不意に背中を叩かれた。

「何見てるの？」

瞳子は振り返る。服屋のショップバッグを大切そうに抱えた佳織が、不思議そうに瞳子を見ていた。

「……ううん、別に」

「お待たせー」

佳織の後ろから、知奈が顔を出す。彼女もまた同じショップバッグを片手に下げている。まだ暑さは続いているのに、ショップバッグは早くも秋らしいデザインになっている。

「気に入ったのが見つかって良かったね」

「うん。夏のセールでもいっぱい買ったけど、やっぱり我慢できなくて」

「ほんと、大出費だよ。秋物ってなんでこんなに可愛いんだろ」

「瞳子は何も買わなくてよかったの？ あのワンピースとか可愛かったじゃん」

「わたしにはちよつと可愛すぎるよ」

「えー、絶対似合うよお」

「似合う似合う、着てるのこ見てみたいー」

女子高生らしく他愛ない会話を繰り広げながら、並んで雑踏を歩く。人込みの中には、他校の制服の姿もちらほら見える。暑さも手伝って制服はかなり着崩れて、遊びから勉強へシフトしきれていない雰囲気だ。夏休み明けの実力テストを終えたばかりだけれど、やはり皆まだ夏休み気分を引きずっているらしい。

少しずつ落ちてくる太陽が、半袖のセーラー服からのぞく腕をじりじりと焼いている。暑苦しく蒸れた風が、自動車の排気ガスと混ざって頬を撫でた。汗と、湿った香水と、食べものの匂いがごちゃ混ぜになつて息苦しかった。夏の人込みは苦手だ。会話の切れ目を狙つてこつそりため息を吐いたとき、佳織が顔を覗き込んできた。

「ね、どこかカフェにでも入つて涼んでいこうよ」

瞳子はちよつと考えるふりをしてから、

「んー、わたし、今日はいいや。夕食当番だからそろそろ帰らないと」

腕時計を覗き込んで、もつともらしく言う。あ、そうか、と佳織と知奈は思い出したように、目をぼちくりさせた。

「そうだったよね、ごめん、連れ回しちゃつて」

「いいのいいの、楽しかつたし」

「ていうか、ほんと瞳子えらいよねえ」

「全然えらくないよー。簡単なのしか作れないもん」

瞳子は、大げさに笑つて空気をほぐす。簡単なのつてどんなの？ えー、目玉焼きとか。それ夕ごはんじゃなくて朝ごはんじゃん！ どつと二人が笑い声をあげた。もちろん、瞳子も笑う。

「また買い物こようよ、気分転換に」

「あのワンピース、残つてるといいね」

駅の改札の前で二人と別れた。

ふ、と肩から力が抜けるのを感じた。スクールバッグから定期を取り出して、改札を通る。

電車を待つ間に、スカートのポケットから音楽プレイヤーを取り出した。少しずつ帰宅ラッシュの始まったホームは、主に同年代の高校生たちで騒がしい。瞳子は、一際高い笑い声を上げる女子高生の塊から注意深く距離を取った。周囲の客が迷惑そうにしても、彼女らは気付かない。まるで結界でも張られているようだ。

そろそろと息を吸って、吐く。

息を吸って、吐く。それだけのことに、瞳子は時々ひどく神経質になる。空気はたまに、急激に粘度を増して、滑らかな呼吸を妨げることがある。

生ぬるい風と共に、ホームへ電車が滑り込んできた。

家というものは、安息の場所だろうか。

瞳子はいつも、そう考えずにはいられない。

瞳子の家は、私鉄沿線の住宅街にある。どちらかというと言裕層の住む辺りだ。

白い壁に黒っぽい屋根、二階建てでシンプルモダンな外装の瞳子の家は、父が建てたものである。

瞳子の父は建築家だ。何とかいうオフィスのデザイナーだの、どこだかの大学の校舎の改修だの、住宅だけではなく色々な建物を造っている。有名なデザイナーの賞もいくつか受賞しているらしい。

瞳子はそれを、父の設計事務所のホームページを見た時に知った。そのページには父が手掛けた作品のリストがずらりと並んでいた。

よくこれだけ仕事をしたものだとは思えなかった。

瞳子は、ポケットから家の鍵を取り出す。鍵穴に差し込み、ゆっくり鍵を回して、開ける。ドアノブに手をかけて慎重に引く。細く開けてそこに自分の身体をすべりこませ、なるべく音を立てないようにしてドアを閉めた。素早く鍵を

かけ直す。

二階に辿りつくまで緊張は解けない。脱いだローファーを揃えて、気配を伺った。家の中はしんと静まりかえっている。スクールバッグを抱きしめ、足音を立てないようにしながら小走りで階段へ向かった。和室は見ないようにする。早く二階に行きたい。

「瞳子？」

階段の踊り場にさしかかったとき、上から影がさした。見上げると、兄の慧の顔があつた。慧は、白い手袋をはめた手を軽く振った。瞳子はほっと息を吐く。

階段を上がりきると、液晶テレビとソファセットが目飛び込んでくる。この家の主な生活空間は二階にある。リビングもキッチンもダイニングも、兄妹それぞれの寝室も二階だ。ただし、風呂場だけは一階だ。キッチンやトイレが二階なんだから、水周りは全部二階に揃えてしまえば良かったのにと瞳子は思う。

「着替えてきなさい、瞳子。夕食にしよう」

慧が何でもないことのように言った。セーラー服のスカーフをゆるめていた瞳子はびっくりする。

「待って、今夜の当番わたしでしょ？」

「作っちゃった。瞳子、テスト明けだから外で遊んでくるかなと思って」

「わたしはちゃんと作るつもりだったのに」

思わず声を荒げると、それを遮るように慧は柔らかに頷いた。

「それで早く帰ってきてくれたのか。ありがとう」

と、巷の女の子たちを夢中にさせているアイドルも霞むような微笑みを浮かべる。思いきり勢いを削がれてしまった瞳子は、その微笑を受け取りながら頷くしかなかった。

この世には鑑賞用の人間というものがある。と、瞳子は考えている。誰もがアイドル、タレント、俳優になれるわけではなくて、やはり大勢に見られるのに適した人間というカテゴリーの人間があるのだ。スーパーで売られている肉が力

レー用、焼き肉用、しゃぶしゃぶ用と分かれているように。

「ほら、着替えておいで」

「はあ」

瞳子はスクールバッグをぶんぶん振り回しながら自室に向かった。クローゼットを開け、ハンガーに制服を吊るす。部屋着に着替えながら、ぼんやりと考える。

慧は鑑賞用の人間だと、思う。

容姿は申し分なく、背もすらりと高い。身のこなしも、どこことなく洗練されている。

けれど、ただ鑑賞用とも言いきれない。

それは、彼が実用的な面を持っているからだ。

慧と瞳子の暮らしは彼の収入で成り立っている。慧の職業を、瞳子はよく知らない。慧から聞いたことと、彼の仕事環境など諸々の情報を総括すると、ウェブデザイナーのかたわらデイトレードをしているらしい。瞳子はパソコンも株取引もさっぱりだから、正直、説明されても分からない。ただ、株取引で利益を上げ続けるには、値動きへの洞察力と高レベルな判断力を要すると聞いたことがある。慧は頭の良い人なのだと思う。実用的な人間なのだ。

自分も同じくらいのレベルだったら良かった。瞳子は時々、そう考える。

瞳子が通う高校は、慧が通った県下一の進学校よりもワンランク下の高校だ。偏差値の差は片手の指で足りる。だが、それだけ慧から遠いのだと感じる。

クローゼットの内扉の鏡に映る自分と目が合う。

瞳子は慧に似ていた。ひとつひとつのパーツは違う。慧はやや垂れ目だが、瞳子は猫のような目。髪も、慧はふわふわだが瞳子のは硬くて真っ直ぐに伸びている。けれど、全体の雰囲気は、不気味なほどに同じだった。

慧が普通に出歩くことができていた頃までは、二人で外を歩くと決まって「お人形さんみたいな兄妹ね」と言われた。瞳子と慧は似ている。だが、慧と違って、瞳子はまだ実用的な人間ではない。瞳子は、密かに焦っている。

〈中略〉

夢を見た。

いつも見る夢だった。

瞳子は、街の中を歩いている。街、というテンプレートによつて忠実に再現された、無個性な街だ。幅の広い三車線の道路と、整備された街路樹と、同じくよく整備された歩道。そして、道の両脇にビルが立ち並んでいる。銀行、デパート、喫茶店、そういった店が入った普通のビル。

けれど、この街には人がいない。生き物がいない。店の中は、霽がかかったようにぼんやりしていて、何かあるのかはつきり見えない。道路を走っている自動車は、何か得体のしれないものが運転している。瞳子の知っている、生きているものの気配は、無い。

瞳子は、不気味な街を黙々と歩き続ける。

探し物をしているからだ。

誰もいない街を歩きながら、ビルを見上げる。そして、慎重にそのビルの階数を数える。

何故だろうか。いくつかのビルをぼんやりと眺めると、目当てのものがあつた。ひとつずつ数えてみると、いつでも足りない。明らかに足りていそうなものでも、注意して見てみると絶対に足りないのだった。

瞳子は繰り返して、街のビルを見上げ続ける。

数えている間はまた、生きていられる。

けれど、数え終わったら。そのときは……。

目を開ける。

遮光カーテンの隙間から朝陽が細く差し込んでいた。壁の、朝陽に照らされる位置に、丸いものがかかっていた。時計だ。七時、少し前。

瞳子はのろのろと起き上がった。何かが戻ってくる気配が、少しずつ全身に染みわたってくる。不気味な街から現実の朝へ帰還するときの感覚だ。

その後、帰宅してからのことを瞳子は反芻する。家の中では何事もなかったけれど、本はまだ一行も読んでいないし、低気圧が近づいているのか鈍い頭痛が止まなかった。

進路希望調査票をまた書き忘れてしまったことに気付いたのは、朝のホームルームが終わったときだった。教卓に近づこうとしない瞳子を、奥山先生は何か言いたそうにじつと見ている。

帰りのホームルームまでに書かないとまた呼びだした。一限目の数学の教科書の上にプリントを広げ、瞳子はシャーペンをくるくる回す。結局、この紙について、慧とは何も話していない。

「あれ、砂川。それまだ出してなかったの」
机に影がさす。前の席の三上隆志だった。

「ああ、うん……うっかり」
「なんか意外。砂川って、そういうのいつもきっちり提出するのに」

三上は真つ白なプリントを無邪気に覗き込んだ。瞳子が曖昧に笑っていると、椅子ごとこちらを振り返って更に話を続ける。

「でも確かに迷うよな、進路はさ。俺もぎりぎりに出したし」
「三上くんはもう大学まで決めているの？」

「それはまだ絞りこめてないけど。学部までは決めてる」
「ふうん……何学部？」

「教育学部だよ。一応、将来もそっち方面にいきたいし」

よく似合うな、と頬杖をつきながら瞳子は思う。三上はサッカー部のエース、成績も先生からのうけも良いクラスの中心人物だ。いまは生徒会の書記を務めていて、間近に迫った生徒会長選挙に立候補するらしいという噂もある。教育学部という選択は「よくできた少年」のモデルケースのような彼にはびつたりに思えた。

「じゃあそれでいいや」

志望学部の欄に「教育学部」と書いた。我ながら似合わないと思うが、とにかくプリントの白い部分を埋められれば良かった。

プリントをぞんざいに机の中に放りこむ。てきとーすぎ、と三上が苦笑した。

本鈴が鳴った。クラスメイトたちは一斉に席に着き始める。

帰りのホームルームと掃除を終えた後、瞳子は奥山先生がいないのを見計らって、職員室の先生の机の上に進路希望調査票を置いてきた。学部も書いたし、これでもうしばらくは、何も言われないだろう。

図書室に立ち寄ったが、閲覧席を賑やかな集団が占拠していたので即座に回れ右をした。上靴の靴紐が緑色ということは、三年生だ。いまひとつ受験勉強に身が入らないのだろう。来年は我が身、と思うと憂鬱になる。瞳子は参考書も何も入っていないのに重たいバッグを抱えて昇降口を出た。

そのままぼんやりと歩く。気付くと、いつもの癖でつい市の図書館に来てしまった。

エレベーターホールに入る。

あの水槽は、まだ置いてあった。瞳子はおつかなびつくり水槽を覗く。何事もなかったような顔をして、ザリガニが水に揺られていた。瞳子は無意識に止めていた息を、はあっと吐き出した。グッピーは一匹もいない。頭から食いちぎられて、半分になったやつも、もういなかった。ぼんやり眺めていると、事務員らしい男性が書類を抱えながらエレベーターから降りてきた。男性は水槽を見つめる瞳子をちらりと一瞥して、そのまま去ってしまった。瞳子は、ぞくりと背筋が粟立ったのを感じた。

(気付いていない、のか……)

この水槽の中に恐ろしい殺人犯がいることを。

小さな命は、この密室の中で喰われてしまった。それを知っているのは、瞳子と、環だけだ。

瞳子は止まったままのエレベーターには乗らず、踵を返した。そのまま、昨日たどった道を歩き出す。

なるべくカウベルが鳴らないように、ゆっくりドアを開けた。だが、カウベルは瞳子の来訪を喜ぶように派手な音を立てた。瞳子は焦ったが、これだけ音が鳴ったというのに誰も出てこない。商売をする気があるのかないのか、それでもこの状況に幾分ほつとほつと、恐る恐る店の中に入ってゆく。

並ぶ水槽たちを見て回る。水槽に貼られたプレートを見なければ名前が分からない魚ばかりだ。瞳子には、グッピーかエンゼルフィッシュ、メダカ、それに金魚くらいしか分からなかった。多くは熱帯魚らしい。いかにも魚らしい銀色から、茶色、黒、青、冗談のような赤やオレンジ色、不思議な縞模様のもまで。これだけの水槽に囲まれていると、何だか自分まで水の中にいるように思えてくる。

しげしげと眺めていると、奥から誰かが出てきた。

「……あ」

「……いらつしやいませ」

レジカウンターの奥から姿を現したのは、環だった。瞳子は反射的に会釈する。

環は、黒のタンクトップに昨日も見たネイビーブルーのエプロンをかけ、両手いっぱい箱をいくつも抱えていた。水槽の濾過装置らしかった。立ち尽くす瞳子をちらつと見やしたが、別段「何しに来た」とも「出て行け」とも言わずにもくもくと商品を陳列し始めた。その背中に、微かな違和感を覚える。

タンクトップの隙間からちらつと妙なものが覗いた。

右肩に、引き摺られたような薄赤い痕があった。

火傷の痕だろうか。その傷痕はまるで羽根のように、黒いタンクトップの中から上腕の方へ描かれている。容易に触れられない雰囲気は激しく立ち昇っていて、瞳子は何も言えなくなつた。そこへ、

「あれー？　昨日の瞳子ちゃんだー」

元気な声が飛び込んできた。舜也だつた。明るい金色の前髪を、まるで女子高生のようにヘアピンで留め上げている。いらつしやい、とにこにこ笑いかけてくる。

「あの……昨日は、ごめんなさい」

「えっ？　何が？」

「失礼なことをしてしまつて……」

「気にしないよ。瞳子ちゃん、いい子だもん」

「え？」

舜也は優しく微笑んだ。すると、きゆうつとまなじりが下がって、途端に幼い顔になる。

「環から聞いた。ザリガニに喰われてたグッピーの心配してくれたんでしょ？　悪い子のはずがないよ」

悪い子のはずがないよ、という言葉がじんわり胸に染みてゆく。前触れなく、ふわつとした何かが入り込んできそうに、瞳子は意識を逸らそうと、慌てて周りを見回した。

ひとつの水槽に目が止まる。ピロードのような質感の巨大な尾びれを持った魚が、大きめの水槽の中で悠々と泳いでいた。青いひれは、揺れると少し金属っぽい光沢も持っている。優雅にたゆたうさまは、ドレスを着た貴婦人のようだ。「あれはね、シヨーベタのハーフムーン。ターコイズブルーの個体。シヨーベタは色やひれの形にバリエーションがあるし、見栄えがいいから愛好家も多いんだ」

舜也が教えてくれた。なるほど、近くの水槽には同じ形でも赤いものや黒いもの、銀色のもの、体だけ青くひれは赤いものもいる。

「綺麗な魚ですね……」

水槽を眺めながら呟く。舜也は嬉しそうに頷いた。

「グッピー見てく？ カウンターにいるよ」

案内されるまま、店の奥の方へ進んでゆく。レジカウンターの前に昨日見た小さな水槽があった。よく見ると、グッピーの数が増えていた。四匹ほどがちよろちよろと、水草の隙間を泳いでいる。

「寂しくないように店の水槽からちよつと移したんだ。環がね」

そつと舜也が教えてくれる。瞳子は少しだけ、びつくりする。

「瞳子ちゃん、魚、嫌い？」

真剣な眼差しで問われて、瞳子は逡巡した。少し考え、目の前のグッピーを見て、首を横に振る。

「全部嫌いつていうわけでは、ないです」

その答えを聞いて、舜也は安堵のため息を吐いた。それからぱつと表情を変えて、

「あのね、環つてき、見た目ちよつと怖いかもしれないけど、いいやつなんだよ。つんけんしてるけど、仕事すつげえ真面目にやるし、俺も見た目はこんなんだけど、ぜんぜん怖くないし」

必死にたたみかける姿がおかしくて、瞳子は噴きだしてしまった。舜也は「あー……ごめん、話まとまってないよね」と呻きながら、ぐしゃぐしゃと頭をかく。

「だから、ええと、何が言いたいかつていうとね、いつでもこいつに会いに来てくれたらなつて」

こつん、とグッピーの水槽を軽く叩く。瞳子が頷くと、舜也は照れ臭そうにはにかんだ。

「じゃ、俺、外掃除の時間だから。ゆつくりしてつて」
カウンターの影からホウキとチリトリを取り出して、舜也は外に飛び出してゆく。その背中を見送つて、瞳子は水槽に目線を合わせるようにかがみこんだ。指先でガラスを撫でると、一匹がすいっと寄つてきた。体色から何となく、図書館のグッピーかな、と思う。

「よかつたね……」

呟いたとき、背中に人の気配を感じて振り向いた。環が立っていた。ひつ、と悲鳴をあげそうになるのを何とかこらえる。しばしの、沈黙。

と、環がおもむろに何か差し出した。

「餌、やる？」

「……いいんですか」

「ん」

瞳子は、彼が手にしていた円筒状のプラスチックケースを受け取って、蓋を開けてみる。中には人工的に配合した飼料らしい粒が入っていた。ケースについていた小さなスプーンを使って餌をすくう。さつそく水槽の中へ入れようとしたとき、環の声が飛んだ。

「そんないっぱい入れんな」

「えっ。多い？」

「多すぎ。入れていいのは一回で食べきれぬ量だけ」

スプーン山盛りにしていた餌を半分程度にしてみる。環が頷く。お許しが出た。

水槽にはばらばら撒くと、すぐさま水草の中からグッピー達が出てきた。水面に広がる餌をひよいとばかり飲み込み込んでゆく。小さな口へ次々に吸い込まれてゆく様子が面白くて、瞳子はじつと見入った。

「……面白い？」

環が自分に訊ねたのだ、ということに気付くのに五秒ほど時間がかかった。

瞳子は慌てて環を見る。彼は腕を組んでグッピーを見ていた。

「面白い……です。生き物飼ったこと、ないから」

「ああ、そんな感じする」

環は瞳子の手から容器を取って、ばこんと蓋を閉める。

「魚、好きなんですか」

「好きだよ」

さらっと言い放つ、その拘らない、物怖じしない声色が清々しい。

「また、来てもいいですか」

環が振り向いた。瞳子はその射抜くような視線を受けて、あ、凶々しかったかも、と焦る。

「いや、あの、邪魔ですよね。買いたくないのに」

切れ長の細い目でまっすぐ見られて、瞳子は理由もなく、緊張する。

「嫌いなんじゃないの。魚」

「……魚が嫌っていうわけじゃなくて、あの……金魚だけ、苦手で」

金魚という言葉を口にするだけで、喉に鉛が詰め込まれたような気分になる。必死で唾をためて飲み込もうとしても飲み下せない塊のように、それは重苦しく、瞳子の内側に澱んだ。

俯いてしまった瞳子を見下ろしながら、環は言った。

「別に構わないけど。見るだけで帰る客も結構いるし、金魚だけいるわけでもないし。気が向いたらまた来れば」
環はそれだけ言つてカウンターを離れた。クロスを手には、アクリルの水槽を丁寧に拭いてゆく。

カウンターの上の水槽に目を戻す。水槽を撫でると、瞳子の小指ほどしかない魚たちが、すうっと集まってきた。飲み込めない塊が小さくなった感じが、ほんの少しだけ、する。

〈後略〉